

近作について

ご招待いただいて、ありがとうございます。今日は最初に自分が最近つくっているもの、またはできてすぐのものをいくつかお見せしたいと思います。最初に僕の設計体制についてお話ししたいと思います。僕は設計事務所を二つ持っています。一つは西沢建築設計事務所といって僕が個人で活動する事務所です。もう一つはSANAA(註1)といって共同設計のための場ですね。元々、僕がボスだった妹島和世(註2)と共同で一九九五年に設立しました。僕が独立して、西沢事務所をつくる際に同時にSANAAをひくることになりました。SANAAというのは当時、シドニー現代美術館(註3)のコンペがありまして、それに招待されたことがきっかけでつくった事務所です。それに勝って事務所をつくったのですが、いろいろありまして、運悪く仕事自体はキャンセルになったのですが、その後いくつかのコンペに勝つことができて、今もまだ海外の仕事が続いているおかげでSANAAは存続しています。基本的にはSANAAは海外の仕事、または国内でも大きなコンペティションとかの場合は共同でやるのがいいのではないかとこのことでSANAAで、西沢事務所では国内の仕事、または小さな仕事、いくつか例外はありますが、割り切っています。同じように妹島事務所というものが一番古い事務所でも今も存続しているのですが、国内の仕事は妹島事務所やって、共同設計はSANAAでやるという体制で、二つのビルの中に三つの事務所が同居しているという状態で設計活動をやっています。今日は自分が西沢事務所です。やってきたいいくつかの仕事と共同設計で主に海外でやってきた仕事をいくつかお見せしたいと思います。

自由さを持つ人たち

最初の作品は直島で計画している美術館です。直島は皆さんご存知だと思いますが、美術活動で有名な瀬戸内海上に浮かぶ島です。そこにある地中美術館(註4)のオーナーが、もう一つ美術館をつくるということで僕がやることになりました。場所はこのように瀬戸内海に囲まれた場所で、要求条件は非常に変わっています。展示作品が二つだけというもので、その作品を替えずに永久展示をするというものです。またその二つの作品は、別の作家によってつくられたものです。要求条件としては非常に特殊なものです。というのは今までやってきた美術館の数少ない経験から言いますと、現在も生きているアーティストはほとんどみんな他人と一緒に作品を展示するのを嫌がるんですね。展示がぎゅぎゅぎゅ詰めになるのを嫌がって、一つの部屋に自分の作品ができるという状態を望みますね。そういった意味で別々の作家による二つの作品を一つの部屋に展示するというのは、非常にユニークに感じました。いずれにせよ、そのような条件で建築家である僕は、光の状態とどういふワンルーム空間というものが作品にとって良いかということを考えるようにと決めました。これが最初につくったイメージダイアグラムみたいなものです(図1)。水滴のようなかたちをした空間。それはいろいろなかたちを考えているうちに四角からぐるぐる変わっていき最終的に丸になって、このような自由曲面によってつくられるワンルーム空間というものが一番ワンルームらしいという感じがするかなと思います、このような空間を考えました。それは作品の位置や大きさによって

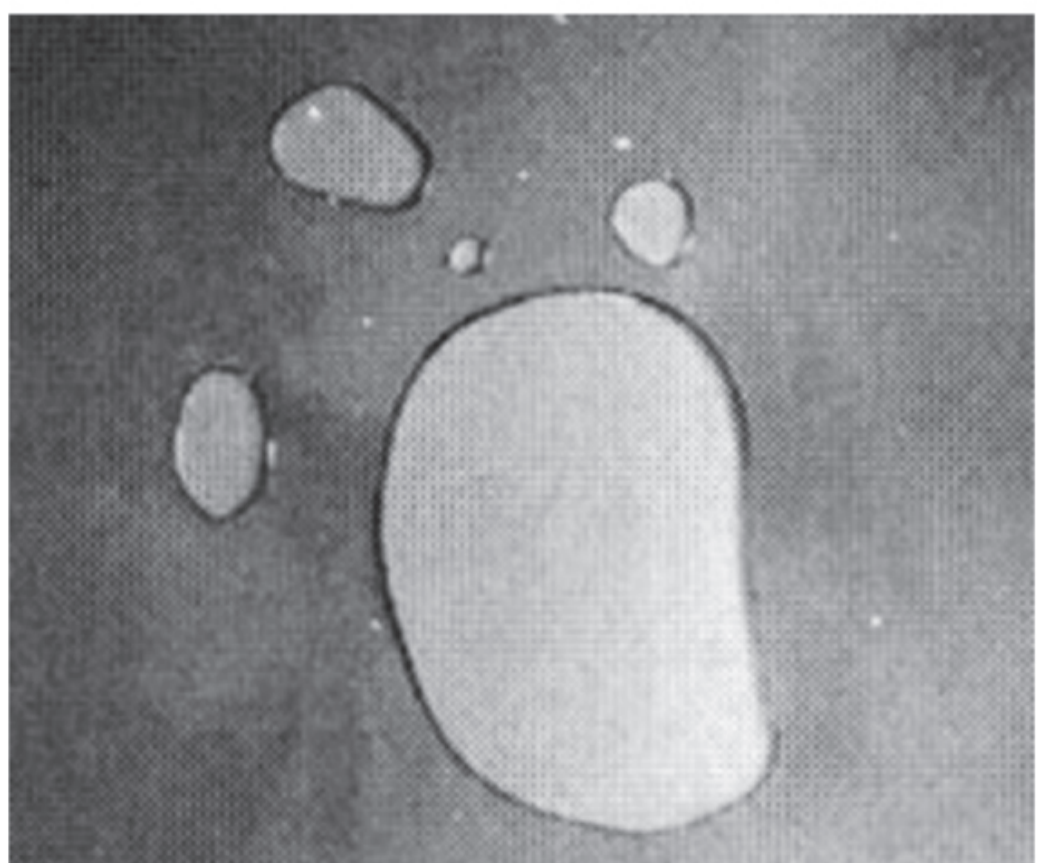


図1 「N museum」ダイアグラム

1 註

SANAA  
建築家の妹島和世と西沢立衛による建築家トビタテ。Sejima And Nishizawa And Associatesの頭文字。  
主な作品に、テネンホール表参道(2003)、金沢二世紀美術館(2004)、スタッド・シニアターナル(2006)など。

2

妹島和世(建築家/慶應義塾大学理工学部客員教授)  
日本女子大学大学院修了(1981)  
同年伊東豊雄建築設計事務所入所  
妹島和世建築設計事務所設立(1987)  
SANAAを西沢立衛と共同設立(1995)  
主な作品に、森の別荘(1994)、熊野古道なかへち美術館(1997)、梅林の家(2003)など。

3

シドニー現代美術館  
1997年の国際コンペに優勝し、同美術館の隣接地に映像をテーマとする別館のデザインをはずさず、ところが別館の計画が白紙となり、新たな増改築プランが浮上。全く新しいコンペの審査が2000年に行われ、地元シドニーの建築家の案が採用された。

4

地中美術館  
安藤忠雄設計。美術館全体が地下にありながら自然光を採り入れられ、一日のうちでも時間によって作品の見え方が変化するのも魅力の一つであり、建物全体が巨大な芸術作品のようである。